

続 野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク

研究代表者：

児玉 華奈（教育学研究科・生涯教育学講座・博士課程）

研究分担者：

生駒 佳也（教育学研究科・専修コース・修士課程）

岡田 薪子（教育学研究科・専修コース・修士課程）

1. 研究目的

野殿・童仙房地域は、京都府最南端の南山城村にある125戸（平成21年1月現在）からなる標高約500mの高原の農村である。野殿は近世から続く古い歴史をもつ村落であり、一方、童仙房は明治に入って開拓政策によって作られた近代村である。背景の異なる両地区は、それぞれ独自の共同体を形成しているが、小学校を共有することで結びついていた。

両地区の子どもたちが通う野殿童仙房小学校は2006年3月をもって閉校したが、同年6月、同小学校区域の住民と京都大学大学院教育学研究科によって「野殿童仙房生涯学習推進委員会」が設けられ、地区住民と大学が新しい「学びの空間」づくりを目指すことになった。小学校が閉校になった後も、野殿童仙房生涯学習推進委員会を設けることで、新たな共同性をもととしているのである。

このため、京都大学と地元との交流や共同の研究会は3年間継続されてきた。当初は、定期的な活動のあり方を模索し、推進委員会の運営を中心に相互理解を進めてきたが、昨年には、研究開発コロキウムを通じて院生が、野殿・童仙房地域に関する歴史や風習、新住人の意識分析を含めた調査を行った。

今年度の研究は、昨年の研究成果に立脚し、習俗や産業及び住人の構成の変遷を見るなかで、今後の両地域のあり方を探ろうとするものである。これらの研究を通じて、両地域と京都大学が、教育を紐帯とした「学びの空間」を形成していくことに寄与したいと考える。



▶地域を支えるお茶畑



▶童仙房の開拓碑

2. 研究活動

各研究分担者は、次のような問題意識をもとに研究に取り組んでいる。

「童仙房地域の葬儀形態について」（児玉）

童仙房地域の葬儀について、地域の方々への聞き取り調査を行いながら、研究を進めている。同地域には、10軒ほどをひとつの単位とする「組」という地域組織が存在し、この組が葬儀の準備をし、葬儀をとりしきっている。同地域はこれまで土葬の形態をとってきたが、2000年代ははじめ頃から火葬へと変わりつつある。これらの事象から、地域の人々の生命観について考察を進めている。

「童仙房地域の入植の歴史について」（生駒）

童仙房は、明治2年に入植が始まった早期の近代開拓村である。当初の地域計画が大きく後退する中で、階層分化が進展し、下層農民の多くが離村した。このため朝鮮人労働者の流入や新たな入植が行われたが、戦後の食糧不足はさらに入植を必要とした。この第三次入植が地域に果たした役割と影響について聞き取りをもとに研究を進めている。

「野殿・童仙房地域の生業形態について」（岡田）

野殿・童仙房は、寒暖の大きい気候を利用した茶業がさかんな地域として知られている。現在では、茶以外に米やトマト・椎茸などが栽培されているが、なかでも茶業は地域の主産業であり続け、住民の多くが関わっている。本研究では、この茶業に焦点をあて、地域にとって「お茶」はどのような意味をもつのか、またこれから地域の生業はどのように展開していくのか、これらの点に関して資料調査やインタビューを通して考察を進めていきたい。

（文責：生駒 佳也）